



藝大定期第 433 回

藝大フィルハーモニア管弦楽団 定期演奏会



2026.4.23 木 19:00 開演

東京藝術大学千住校地 第7ホール

| 主催 | 東京藝術大学音楽学部・東京藝術大学演奏芸術センター



TOKYO GEIDAI

藝大フィルハーモニア管弦楽団 定期演奏会

本日は藝大フィルハーモニア管弦楽団定期演奏会を開催するはこびとなり、心からの喜びを感じております。2月下旬、奏楽堂の舞台上部に設置されていた天井音響反射板が落下するという予期せぬ事故を受け、前音楽学部長の杉本和寛先生、演奏藝術センター長の亀川徹先生、藝大フィル事務局長の酒井敦先生を中心に、藝大フィルが関わる演奏会の維持に向けた模索が始まりました。奏楽堂再開の目処は未だたっておりませんが、7ホールへの移動という形ではあれ、予定通り、藝大キャンパスに藝大フィルの音を響かせることができることを心から嬉しく思いますとともに、開催にむけ尽力して下さった演奏企画室、演奏藝術センターおよび大学執行部の皆様のお力添えに心より感謝いたします。

藝大卒業後目覚ましい活動を展開なさっている太田弦氏の指揮と、本学器楽科教授の玉井菜採氏による共演は、どんな状況下であれ藝大から音を消してはならないという私たちの決意を雄弁に語ってくれることと信じております。

福中冬子（東京藝術大学音楽学部長）

Profile

プロフィール

指揮：太田弦 OHTA Gen, Conductor



94年札幌市生まれ。幼少の頃より、チェロ、ピアノを学ぶ。東京藝術大学音楽学部指揮科を首席で卒業。学内にて安宅賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。同大学院音楽研究科指揮専攻修士課程を修了。2015年第17回東京国際音楽コンクール〈指揮〉で2位ならびに聴衆賞を受賞。第30回(22年度)渡邊暁雄音楽基金音楽賞受賞。25年第23回齋藤秀雄メモリアル基金賞を歴代最年少で受賞。指揮を尾高忠明、高関健の両氏、作曲を二橋潤一氏に師事。山田和樹、パーヴォ・ヤルヴィなどの各氏のレッスンを受講。22年3月まで大阪交響楽団正指揮者を務める。23年4月より仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者、24年4月より九州交響楽団首席指揮者に就任。

ヴァイオリン：玉井菜採 TAMAI Natsumi, Violin



桐朋学園大学在学中に、ブラハの春国際コンクールに優勝。卒業後、アムステルダム・スヴェーリंक音楽院、ミュンヘン音楽大学マイスタークラスにて研鑽を積む。この間、J.S.バッハ国際コンクール最高位をはじめ、エリザベート王妃国際コンクール、シベリウス国際コンクールなど、数々のコンクールに入賞している。平成14年度文化庁芸術祭新人賞、平成20年度京都府文化賞奨励賞など受賞。国内外で、活発な演奏活動を展開している。紀尾井ホール室内管弦楽団コンサートマスター、アンサンブルofトウキョウ・ソロヴァイオリニスト。東京藝術大学教授。使用楽器は藝大所蔵のStradivarius“Ex-Park”(1717)。

Program

J. ブラームス

Johannes Brahms (1833-1897)

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.77 [ヴァイオリン独奏：玉井葉採]

Violin Concerto in D major, op.77 Violin solo: TAMAI Natsumi

第1楽章 Allegro non troppo

第2楽章 Adagio

第3楽章 Allegro giocoso, ma non troppo vivace – Poco più presto

—— 休 憩 *Intermission* ——

P. I. チャイコフスキー

Peter Ilyich Tchaikovsky (1840-1893)

交響曲第4番 へ短調 op.36

Symphony No.4 in f minor, op.36

第1楽章 Andante sostenuto – Moderato con anima

第2楽章 Andantino in modo di canzona

第3楽章 Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro

第4楽章 Finale: Allegro con fuoco

指揮：太田弦

Conductor: OHTA Gen

東館祐真（音楽学、博士後期課程2年）

■ヨハネス・ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77

1878年夏、45歳のヨハネス・ブラームス(1833～1897)は拠点とするウィーンから南西300kmほど離れた避暑地ベルチャハで過ごしていた。前年に同地で書き上げた《交響曲 第2番 ニ長調 作品73》は初演以来好評を博し、さらに翌1月には苦心惨憺のすえ完成させた《交響曲 第1番 ハ短調 作品68》を故郷ハンブルクで演奏した。彼はその演奏会で月桂冠を授かる榮譽に浴した。ふたつの交響曲を生み落としたブラームスは風光明媚なベルチャハにていくつかの作品にとりかかる。この《ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77》はそのうちのひとつだ。

ハンブルクの演奏会ではブラームスが指揮を執ったが、コンサートマスターを務めたのはヨーゼフ・ヨアヒム(1831～1907)だった。メンデルスゾーンの薫陶を受け十代でデビューしたこのヴァイオリニストはブラームスの盟友であり、彼をシューマン夫妻のもとへ導いた人物でもある。ベルチャハにいるブラームスが、ヴァイオリン協奏曲の構想を伝える手紙と独奏ヴァイオリンの譜面の一部をヨアヒムへ送ったのは8月21日のことだった。20年来の友人がコンチェルトを作曲している！おおいに喜んだヨアヒムは「とにかく二、三日会って、話をしようじゃないか」(門馬直美訳)と返信し、ブラームスのもとへ赴いた。ブラームスはその後、ヨアヒムから助言を受けながら作曲を進めていく。当初は4楽章構成だったというのが最終的には3楽章となり、独奏パートにも修正が加えられた。ただしブラームスはヨアヒムの技術的な忠告を全面的に採用したわけではなかったようだ。一方のヨアヒムは早々に初演の手筈を整え、遅筆のブラームスを催促した。

初演は1879年1月1日にライプツィヒでゲヴァントハウス管弦楽団によって行われた。指揮はブラームス、独奏はヨアヒム。その後もブラームスは作品に手を加えていくが、ヨアヒムのしつこい忠告にしびれを切らして相談を中止し、本作を同年にジムロック社より出版した。しかし交友が途絶えたわけではない。ふたりは同年11月に《ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト長調 作品78》を初演している。

第1楽章 ニ長調 アレグロ・ノン・トロッポ、3/4拍子。管弦楽の長い提示に続いて独奏ヴァイオリンが登場し、堂々たる歩みのような音楽が展開していく。ソナタ形式であり、イ長調の第2主題は過ぎ去ったものへの憧れを感じさせる、ブラームスらしい旋律。終盤にはヨアヒムによる独奏ヴァイオリンのカデンツァが置かれる。

第2楽章 ヘ長調 アダージョ、2/4拍子は冒頭のオーボエによる旋律が独奏ヴァイオリンの主導する中間部を経てもういちど現れる三部形式。中間部は嬰ヘ短調でコロラトゥーラのようなパッセージが奏でられる。

第3楽章 ニ長調 アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロッポーボコ・ビウ・プレスト、2/4拍子。冒頭の力強いロマ(ジブシー)風の楽句が繰り返されるロンド・ソナタ形式。独奏ヴァイオリンが急速な下降音型を奏でたあと、トルコ行進曲風のコーダで快活に終止する。ハンガリー生まれのヨアヒムはこの終楽章を気に入っただろう。

■ピョートル・チャイコフスキー：交響曲第4番 ヘ短調 作品36

1877年夏、37歳のピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～1893)は結婚した。アントニーナという見ず知らずの女性から愛の手紙を受け取った彼は、6月に婚約、7月には結婚式を挙げた。しかし両者の性格的不一致と生活上の混乱は深刻だった。10月はじめ、チャイコフスキーは弟と知人を介して離婚を申し出る。ともに暮らしたのは33日間だった。

新妻との生活に憔悴しきった作曲家を支えたのは、文通相手の富裕な未亡人ナジェージダ・フォン・メックである。彼女は手紙で彼を慰めるだけでなく、経済的な援助も約束した。彼女の厚意を受けたチャイコフスキーは、同年末にイタリアのサン・レモでひとつのシンフォニーを完成させる。本作は77年3月以前に着手され、かねてからメックへ献呈することを約束していた。翌年2月にモスクワにて初演され、80年にユルゲンソン社より出版された。出版譜の献辞「最良の男友達に」は匿名を望んだメックの意図を汲んだものだった。「交響曲が誰に捧げられてあるかはあなたと私とだけが承知していることです。」(1877年6月8日、チャイコフスキーによるメック宛の書簡より、服部龍太郎訳)

以上のような経緯で完成された《交響曲 第4番 ヘ短調 作品36》は、しばしばチャイコフスキーのプライベートな精神的危機とその回復という視点から語られる。確かにこの作品は——ロシア宮廷文化の舞踏であるポロネーズを終楽章においた《交響曲 第3番 ニ長調 作品29》(1875年完成)が公共的な性格をまとっているのに対して——なんらかの“私的な物語”を伝えているように感じさせる。作曲者自身も特定のプログラムを念頭に置いていたことはメック宛の書簡から推察できる。

第1楽章 ヘ短調 アンダンテ・ソステヌート、3/4拍子—モデラート・コン・アニマ、9/8拍子の冒頭で鳴り響く「運命 fatum」の主題と呼ばれるファンファーレは劇的な印象を与えるだろう。この主題は展開部において9/8拍子の第1主題と対置される。本作品からはまたチャイコフスキーの熟達した作曲語法を聴くことができる。第2楽章 変ロ短調 アンダンティーノ、イン・モード・ディ・カンツォーナ、2/4拍子では旋律作家としての才が遺憾なく発揮され、第3楽章 ヘ長調 スケルツォ(ピツィカート・オスティナート)、2/4拍子では独特な管弦楽法が用いられる。そして第4楽章 ヘ長調 アレグロ・コン・フォーコ、4/4拍子において民謡を中心的主題とする祝祭的なフィナーレが繰り広げられるが、唐突に「運命」の主題が割り込んでくる。この主題はドイツ的な動機労作としてではなく、人間に襲いかかる外的な力の象徴のように超然として現れる。それは自由な個人の内面と、制御不能な外部世界との衝突を示しているようにも聴き取れる。

* * *

1877年春、ロシア帝国は戦争をはじめた。1870年代のバルカン半島ではセルビア人などの諸民族によるオスマン帝国の支配に対する反乱が相次ぎ、これに対するオスマン帝国の苛烈な弾圧はヨーロッパに衝撃を与えた。ロシアではバルカンの正教徒との連帯を掲げる「汎スラヴ主義」へ世論が傾いていき、76年6月末にセルビアがオスマン帝国と開戦すると、ロシア国内からは多くの義勇兵がセルビアへ赴いた。外交的解決は失敗に終わり、77年4月26日、^{フーリ}皇帝アレクサンドル2世はオスマン帝国に宣戦を布告した。露土戦争である。ロシアはこの戦争にスラヴ民族救済の理念を掲げたが、

その目的は南下政策、すなわち不凍港獲得という18世紀以来の国家的関心と切り離せるものではなかっただろう。

チャイコフスキーは76年9月に《スラヴ行進曲 作品31》とのちに題される管弦楽曲をバルカン支援演奏会への新作として書いている。彼はバルカンへの出兵を支持していたという。一方で作曲家とも交流のあった作家レフ・トルストイ(1828～1910)は77年に長編小説『アンナ・カレーニナ』を完成させる。主人公のひとりであり人妻アンナと関係をもつ若き軍人ヴロンスキーは、アンナを喪った最終編において、友人の誘いから私費を投じて義勇兵を引率しセルビアへ向かうが、「武器としてはわたしもなにかのお役に立てるかもしれません。ですが、人間としては、わたしは廃残の身です」(中村融訳)と、その心はうつろである。またモスクワに身を置く登場人物のひとは、「スラヴ問題は次々と変りながらいつも世間に話題を提供する一つの流行と化してしまっていた」(同上)と考察する。戦争にむかって沸き立つ世論に知識人たちは翻弄されていた。本作の第4楽章のプログラムについて、チャイコフスキーはメックに次のように説明している。

自分のうちにどうしても幸福を見出せない者は、他人を見てごらんさい。民衆の仲間に加わって、彼らがどんなにして人生を楽しみ、自分を忘れてお祭騒ぎをしているかを見てみましょう。田舎の休日が描かれています。他人の幸福を眺めても、自分を忘れるだけの余裕がほとんどないときは、しつこい運命に面接していることをもう一度思いださせられます。他の人たちはわれわれの方に気をくばりません。われわれに目をくれようともせず、われわれが悲しくて淋しいことに気づこうとしません。彼らはなんと楽しそうに、なんと愉快そうにしていることでしょう！

——1878年3月1日、チャイコフスキーによるメック宛の書簡より、服部龍太郎訳

自分を忘れてお祭騒ぎをしている「田舎の休日」の人びとは、『アンナ・カレーニナ』の戦争に熱狂するモスクワの群衆とどれほど違うだろうか。

ふたりがそんな話をしていた折に、群衆が食堂の方へと彼らのそばをなだれていった。彼らも押し流されたが、そのとき、杯を手にして義勇兵たちに演説をしていた一人の紳士の大きな声が聞こえた。《信仰のため、人類のため、われらが同胞のために仕えんとする》——とますます声をあげましながら、その紳士は言った。《この一大偉業に対して母なるモスクワは諸土を祝福するものであります。ジヴィオー！[セルビア語で万歳の意味]》——大声で涙ぐましく彼は言葉をむすんだ。

一同は「ジヴィオー」を叫んだ。するとさらにまた新たな群衆が待合室になだれこんで、公爵夫人はあぶなく押し倒されそうになった。

——トルストイ『アンナ・カレーニナ』第8編より、中村融訳

この作品を聴き終わったときに抱く感想は、興奮だろうか、それとも孤独だろうか。そこにあるのは社会への同調だろうか、それとも社会との衝突だろうか。この交響曲にはっきりとした答えは存在しない。だがそこで示されているテーマは、私たちの生きる現代にこそ、より痛切に響くだろう。

藝大フィルハーモニア管弦楽団

The Geidai Philharmonia Orchestra, Tokyo

藝大フィルハーモニア管弦楽団は東京藝術大学に所属するプロフェッショナル・オーケストラ。定期演奏会や「モーニング・コンサート」などを行うほか、指揮科学生との演奏会・試験・演習、東京藝大ジュニア・アカデミーとの共演など、学生の演奏経験の拡充にも資している。学外でも、近年では新国立劇場、彩の国さいたま芸術劇場、また長崎県、新潟県、秋田県での公演が好評を博したほか、今年2月21日には茨城県取手市民会館にも登壇。海外では2017年6月のチリでの4公演（日本・チリ修好120周年記念）に続き、2023年12月にはアルゼンチンのコロン劇場（Teatro Colón）での公演で満員の聴衆を魅了した。（公社）日本オーケストラ連盟準会員。

ソロ・コンサートマスター

植村太郎

コンサートマスター

澤亜樹

對馬佳祐

第1ヴァイオリン

荒井友美

生田絵美

加藤えりな

金子芳子

河野由里恵

佐原敦子

菅谷早葉

西田史朗

前田奈緒

増尾朗子

第2ヴァイオリン

村津瑠紀 ○

山本有紗 ○

清岡優子

小杉結

野田良子

福井彩花

福岡雄也

マヤ・フレーザー

宮本有里

吉原葉子 *

ヴィオラ

安藤裕子 ○

吉田篤 ○

阿部哲

梶岡弥生

中川玲美子

麻柄明日香

高梨瑞紀 *

山田那央 *

チェロ

羽川真介 ○

山澤慧 ○

寺井創

豊田庄吾

夏秋裕一

松本卓以

コントラバス

赤池光治 ○

長坂美玖 ○

倉持敦

小室昌広

小笠原茅乃 *

フルート

細川愛梨

山本葵

棚木彩水 *

オーボエ

戸田智子

山田涼子

クラリネット

濱崎由紀

春田傑

ファゴット

坪井祐樹

宮崎寿理

ホルン

谷ひな子 ○

岡村陽

堂山敦史

梁川笑里

厚東仁菜 ◆

トランペット

平山あかり

星野朱音

トロンボーン

東川暁洋

久保田和弥

小田愛美 *

恵藤康充 *

チューバ

田村優弥 *

ティンパニ &

パーカッション

井手上達

二ツ木千由紀

彌永和沙 *

小林公哉 *

○：首席奏者

*：賛助出演

◆：本学学生

事務局長

酒井敦

事務局次長

小宮山雄太

（チーフ・ステージマネージャー）

小久保綾子

（チーフ・ライブラリアン）

インスペクター

葛谷拓摩

アシスタント・ステージマネージャー

森本直通

徳永芽久

ステージスタッフ

神山巧弥

ライブラリースタッフ

安田沙織

廣田碧

渉外担当

野村智行

嶺井千奈

会計担当

松井勝幸



[発行] 2026年4月23日(木)

[制作] 東京藝術大学演奏藝術センター

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8 TEL:050-5525-2300

編集: 松岡あさひ

デザイン・レイアウト: 伊藤明日奈

※事前の承諾なく転載・複製・改変等の二次使用をすることを固く禁じます。